

『土方巽頌』〔……〕痛切ナル快拳とします。——永田耕衣

永田耕衣と吉岡実——『耕衣百句』とその後

小林一郎

一九五五年八月、吉岡実が詩集『静物』（私家版）で真の出発を遂げた同じ年の一〇月、永田耕衣は第四句集『吹毛集』（近藤書店）で吉岡との出会いを用意した。吉岡は一九六〇年、『與奪鈔』（琴座俳句会）刊行を知り注文購入、これを機に文通が始まる。六七年四月、須磨の田荷軒を訪ね、耕衣と対面、個展のための作品から「白桃図」を予約。六九年七月、日本橋三越の「書と絵による永田耕衣展」で「白桃女神像」を予約、海上雅臣宅を耕衣と訪ね白隠や黄山谷などを観る。十二月、妻に絵「鯁佛」を贈られる。七四年一月、全句集『非佛』（冥草舎）出版記念会で渡辺一考と初めて会う。七六年六月、『耕衣百句』を編みコーベックスから七〇〇部刊行（特装版を南柯書局から八〇部刊行）。八〇年春、傘寿の会に招かれる。八四年七月、田荷軒を土方巽と訪ね耕衣を紹介する。八七年五月、「米寿永田耕衣の日」に出席。この間、耕衣俳句についてたびたび筆を執り、主な文章は『死児』という絵（増補版）（筑摩書房、一九八八）

に収められている。

耕衣は吉岡を詩集『僧侶』（書肆ユリイカ、一九五八）で認めた。第六句集『悪霊』（俳句評論社、一九六四）は吉岡から「この句集は、果敢に新境地をきりひらかんとしている。詩作のうえで、私自身もひとところに停滞することを拒んで、絶えず転化を試みている。そして未成熟な作品をつくってきたから、『悪霊』の観念性のつよい失敗作にも、同調する」（『耕衣百句』「覚書」と評された）。

『耕衣百句』こそ両者の交流の頂点に位置する記念碑と考えられるので、本書を中心に永田耕衣と吉岡実の関係を見ていきたい。まず、吉岡の耕衣宛書簡（姫路文学館永田耕衣文庫所蔵）から「耕衣百句」への最初と最後の言及を引く。この間に第一句集『加古』や初期句集『真風』などが吉岡に贈られ、『吹毛集』『與奪鈔』『悪霊』から二十八句を引いた一九七一年の随想「永田耕衣との出会い」の執筆を通じて、吉岡の百句選の準備は整いつつあった。

「耕衣百句」いずれやります。（一九六七年六月二八日消印葉書）

渡辺一考君とは、京都まで一緒で、『耕衣百句』の打合せをいたしました。

（一九七五年七月七日消印葉書）

初案の「耕衣百句」が書名にまでなったことに感慨を覚える。対面してから本書上梓までに、耕衣は『悪霊』に続く『蘭位』（俳句評論社、一九七〇）と『冷位』（コーベブックス、一九七五）を、吉岡は当時の全詩集『吉岡実詩集』（思潮社、一九六七）から『神秘的な時代の詩』（湯川書房、一九七四）に至る模索の時代の詩集群を刊行している。『僧侶』で到達した絶巔からの下山とも言える試行錯誤の時期に、耕衣俳句を「心すなおに、初期の句から再読、三読して採ってゆくことにした」（覚書）のだから、影響を受けないはずはない。だが不思議なことに、このころの吉岡の詩に耕衣俳句の痕跡は見いださにくい。

吉岡実は永田耕衣からどんな影響を受けたのか。金子晉編『永田耕衣五百句』（永田耕衣の会、一九九九）には冒頭の一句「梅雨に入りて細かに笑ふ鯨かな」しか採られていないが、「鯨笑図七句」全句は『耕衣百句』でひときわ異彩を放っている。耕衣連作の白眉というべき七句が『静物』の巻末詩「過去」をもつ吉岡の詩心を刺激したことは想像に難くない。九節八十四行から成る「僧侶」に「鯨笑図」の残響を聴くのは私だけだろうか。『悪霊』に寄せた吉岡の共感は、『サフラン摘み』（青土社、一九七六）に収められた連禱詩「葉」の冒険に直結している。吉岡は耕衣句をスプリングボードにして、新たな詩境を拓りひらいた。極論すれば、その副産物が『耕衣百句』だった。

『続耕衣百句』（湯川書房、一九九五）の編者金子晉は「あとがき」に「吉岡実編『耕衣百句』がコーベブックスから刊行されたのは昭和五十一年六月のことだった。／あれからもう随分歳月が経ったのに、つい最近のことのように思われる。それだけこの著の放った威力が強烈だったということになるが、誰よりも耕衣はこの著に激励され、興奮し、その後の人生をまことに真摯に追尋してきた」と書いたが、耕衣自身は「吉岡実編著『耕衣百句』（コーベブックス刊）出来。最高の出来栄えなり。渡辺一考の装幀」（俳句集成『而今』の自筆年譜）と自祝している。

吉岡の選択は独特だった。『冷位』に触れて「このごろの小生は、比較的素直なる句が好きなので、禅的なるもの、禅的虚構のあらわなる句は採りませんでした」（覚書）とあるように、俳哲的側面を捨象し、耕衣句の初期からその時点での最新作までを、戦後三十年経った日本の同時代詩の地平に置きなおした。吉岡愛誦の三句「天心にして脇見せり春の雁」「近海に鯛睦み居る涅槃像」「腸の先づ古び行く揚雲雀」は、吉岡や耕衣自身も出席した「シンポジウム 永田耕衣の世界」（『俳句』一九八〇年九月号）において高柳重信が主に『耕衣百句』から選んだテキスト「永田耕衣二十句」に含まれる著名句だが、『吹毛集』のベスト・スリーではあっても、この三句をもって耕衣俳句を代表させること

には無理があるだろう。

吉岡は『耕衣百句』をまとめたことで、耕衣の新作句集からは距離を置きはじめたように思える。吉岡の未刊行の随想に「五月の句——耕衣の句から」（『琅玕』一九八三年五月号）がある。「この一冊『耕衣百句』から、私は「春の句」を抽出してみよう」と十七句を四〇〇字三枚強に鏤めた俳句・書物随想で、三年前の「耕衣秀句抄」の縮小版かと思まがう。当時の吉岡は耕衣の新句集を論う心境になかったのだろう。耕衣に宛てた一九八三年五月四日消印葉書には「街路につつじの花が盛りです。「琅玕」の雑文がお目にとまり、いささか面映ゆい感じですよ。でも、耕衣さんに喜んで頂き、「安心立命」です」とある。「安心立命」は『耕衣百句』栞の「無欲の所業」と題する耕衣文に見える言葉だが、耕衣は「いまさら『耕衣百句』でもあるまいに」と思わなかっただろうか。吉岡も二年後の一九八五年には「此頃の近作を読むたびに、あまりにも「造語」が頻出するので、私は閉口することがある。「……」私も詩作のなかで、しばしば「造語」を挿入するが、とても田荷軒主人にはかなわない」と朝日文庫版耕衣句集の序文「耕衣粗描」に書いて、珍しく苦言を呈している。

『耕衣百句』以後の吉岡の選句は、新句集『殺佛』『肉体』『殺祖』『物質』『葱室』『人生』を特集したときどきの『琴座』に十数句抄の形で掲載されている。そ

れらを別にすると、最もまとまったものは一九八七年三月の「耕衣三十句」（『洗濯船』別冊第二号）だ。吉岡が揮毫した「大雨の葉の水の鯨かな」（『葱室』）は入集していないが、随想「手と掌」の末尾を飾った「てのひらというばけものや天の川」（『蘭位』）が『耕衣百句』に入っていないことを考えれば、選に漏れたなかにも吉岡の記憶に残る佳句は多いことだろう。選句（補句十五を含む四十五句）のみで、「覚書」のような解説文のないのが惜しまれる。

吉岡晩年の詩集『菜玉』（書肆山田、一九八三）に収められた「垂乳根」に次の詩句がある（字下げは割愛）。

父はせつなく（切字）の用法を考え／「紙の上で尻もちをつく」／——あ
けぼのや七人七夢にらの露

「にらの露」から薙上の露、薙露歌、辣蕪——さらには「らつきようを囓るそれがぼくの好みの時だ」と始まる「回復」（『僧侶』）へと連想は続くが、詩句には永田耕衣、土方巽、さらに俳句への憧憬がこめられていよう。

詩人吉岡実の形成に与って大きかった存在は、行動を共にした詩人たちを除けば、西脇順三郎と永田耕衣と土方巽の三人である。戦前の二詩集『昏睡季節』

と『液体』（ともに草蟬舎）成立の契機となったのが北園克衛と富澤赤黄男だったように、戦後初の詩集『静物』の母胎となったのが西脇だ。吉岡が「西脇順三郎アラベスク」（一九七二〜八二）に書き、耕衣が『しゃがむとまがり』（コーベックス、一九七六）の「あとがき」に「西脇順三郎詩集『旅人かへらず』は、私の生涯的初心をつねに瑞々しく煥発しやまぬ、いわば私自身の持佛とさえいえる親睦千万な詩集である」と書いたとおり、二人の西脇への親炙の背景には『旅人かへらず』（東京出版、一九四七）があった。

俳句と西脇詩を愛した詩人が、西脇が書いたかのような耕衣俳句に惹かれたのは、必然だろう。吉岡実にとって永田耕衣は、詩書画を打って一丸とした稀有な人格そのものだった。永田耕衣にとって吉岡実はだれだったのか。耕衣俳句の名伯楽にして土方巽の紹介者、端正な字を書く律儀な人、名のある出版社の人間、なによりも詩人。俳句という同じ星を仰ぎ見る耕衣も吉岡も、先を急ぐ。「ぼくはだいたい、敬愛する詩人も作家もどんどん捨ててつちゃうんです。自分の作品も、もう『僧侶』はいい、あれでいい、もつと先へ歩かなくちゃと思う」とは高橋康也「吉岡実がアリス狩りに出発するとき」、『ノンセンス大全』、晶文社、一九七七）に見える吉岡の発言だ。

最後に想の類似を挙げる。死んだものの持つ、この生命感、猥褻なまでの存在感こそ、耕衣の句と吉岡の詩に共通する両者が決して手放そうとしなかった核である。

寒鮎の死にてぞ臭く匂ひけり

『驢鳴集』

死んだ金魚は臭い

「垂乳根」

*引用文中の改行箇所は／で表示した。

《澤》二〇二一年八月号〈特集・永田耕衣〉